

現代社会では、グローバルな領域において多様性を尊重する誰一人取り残さない社会の実現が目指されている。

多様性が尊重される社会にあって、人のあり方は限りなく多様化・分化していく。既存の社会的な属性と自認に差異を見出し、新たな言葉で自分を社会に位置づけていくのだ。

その際、既存の社会的属性に分類される私よりモク自認としての私クが重要視されるため、他・外から個人を分類して名付けられることは躊躇われるようになる。身近な例を挙げると、教育現場で先生が生徒を呼ぶとき、敬称を「くん」として「さん」で使い分ける、即ち身体的特徴により、男女のいずれかに分けて呼ぶこと、これは時代錯誤とされ、「さん」に統一されるケースが増えている。他者を恣意的にカテゴリー化して名付けられるのではなく、他者から主体的に表明される「自認としての私」を待つことが大切にされているのだ。

しかし、多様性を尊重する社会は、新たな

(1)

問題に直面している。様々な背景によって主体的に名乗れないために社会に埋没してしまふ人々・名乗り認められることをやめて社会から離れ行く人々をどう尊重するのか、という問題である。言うまでもなく、そのようない人々も国際社会において取り残されてはいかない存在である。このように人々を想像しにくいことが、私たちがソーシャルの言語観で生きていく何よりの証明である。このように人々モク存在しないとする言説について、後述する。ここまでは便宜上、名乗れない、名乗らない人々として対象化してきたが、これは私自身に跳ね返ってくる問題と考えている。約一年にわたって学校に通うことかできなかった、三年前の私にとって、社会から取り残されたという感覚は切実なものであった。不登校と他人から名付けられることは屈辱的であった一方で、自分の状態を表す(納得して自認する)言葉を見つかり、たわけではなかったの、精神的にとっても不

(2)

安定な状態だった。このように、名乗りたいのに名乗れず、「社会から取り残されている」という感覚に苛まれ、自ら社会的弱者であることを感じるときが、長く生きていければ一度や二度あるだろう。もしかしたら、平気な顔で隣にいる友人が、クラスにいる誰かが、学校に来っていないあの子が、そういう状況にあるかもしれない。今、さほど差し迫った問題に感じていないけども、「名乗れない」状況は身近にあった、それを放置することは、弱者に自己責任を問う冷たい社会を受け入れてしまふことを意味する。

ここまで「名乗らない・名乗れない人々」について述べてきた。しかし、ソーシャルの言語観に基づくと、名付けられていないものは存在しないことになる。他者を名付けられることが躊躇われる時代において、名乗らない・名乗れない人々を尊重する、つまり名付けずに自己表明を待つことは正しい態度とされるか、それは暫定的に存在を認識しないこ

(3)

とになつてしまふ。そのような状況が起こると、つまり身近な例として、自由の森学園の三大行事の一つである体育祭の競技を決める場が挙げられる。男子枠と女子枠に分けられることによつて、競技への参加が難しくなる人がいるという問題提起がされると、「そんな人、本当にいるの？結局この場に来て話してもらわないと分からない」という声からほぼ聞こえてくる。これらの発言の真意が「純粋に話を聞きたい」というものであると仮定しても、実際には、社会的少数者の立場にある人や属性に関わらず現状に違和感をもち、いる人の自己表明の機会を奪い、名乗りにくい状況を再生産してしまっている。これは、自分下はない誰かの問題ではない。社会的動物として生きる全ての人間は、意識の有無を問わず、自分か属するコミュニティとは異なる部分リマインディ性をもっている。今、自らが多数派として話し合いの場に参加し、自らの意見を通す、もしくは話し合いを早く

(4)

終わらせるために「そんな人、本当に存在す
 るの？」と言葉にしてしまふことは、自らの
 マイノリティ性から目を背け、名乗ることを
 放棄することの意味する。この状態は自らを
 尊重できていないと言えるのではないか。
 あるいは中る差別の根絶を目指す、誰一人取り
 残さない社会は、多様性の枠の外にいて、
 存在を否定されかねない。名乗らない、名乗
 れない人々を包摂している。そんな社会に
 生まる私とは、まだ名乗っていない他者が
 自称するのを待たず、既存の属性に当て
 はめることなく、他との差異を見出し、存在
 を認知しなければならぬという困難を抱えている。
 誰一人取り残さない社会を目指すにあ
 たり、私が入切にしたいことを述べる。それ
 は、自分自身が名乗りを更新していくことで
 ある。名乗ることには、自らと嫌いな他者を切
 り離し（あなたと私は違う）、自らと好きな
 他者と同視する（あなたと私は同じ）効果
 がある。そのため、名乗ることは精神的な安

(5)

定をもたらず。しかし、またすぐに「あなた
 とは違う私」が立ち現れる。ここで重要にな
 るのが名乗りを更新することである。あらか
 りものは絶えず変化する流動態であるから、
 名乗り直すことに終わりはなく、億劫に感じ
 られることもあろう。それでも私は「
 下す」と思う。例え周囲に理解されなく
 も、自分の内的世界に起る変化を大切にし
 たいし、それを言葉にする姿が、他者の自己
 表明を触発することになると思ふから。
 自分について名乗ること、それは自らを開
 示し、社会に存在を位置づけられることを意味す
 る。そしてそれは、他者が名乗ることを誘う
 行為である。私は名乗りを更新していきうと
 思う。また見ぬ他者に出会うために。名乗
 れなかつた私を救い出すために。
 私は名乗りやすい社会に生きたい。だから
 他者に向ける言葉を悩む。選ぶ。他人のペ
 ースで自己表明がなされることを尊重する。
 それが私を尊重することだから。

(6)